

ことばのコミュニケーション

呼称使用の適切さとポライトネス

日時 : 平成 25 年 6 月 26 日（水）16 : 10 - 17 : 40

場所 : 国際文化学部棟 C12 教室

発表者 : 林 炫情 国際文化学部・大学院国際文化学研究科 教授

主催 : 山口県立大学国際文化学部・大学院国際文化学研究科

要旨

意味というのは、ことばの中にのみ存在するものではないし、話者のみ、あるいは聞き手のみによってもたらされるものでもない。話し手と聞き手の間の、そして発話の（物理的、社会的、言語的）文脈とその発話の選択可能な意味の間の、意味の取り決めに関わるダイナミックな過程である（Thomas, 1995; 浅羽監訳, 1998, p.25）。実際のコミュニケーションの場において、話し手はしばしば効率のよい話し方（Grice, 1975 の協調の原理に即した話し方）から逸脱する。それには何らかの理由があるはずであり、聞き手はそれを推測する。非効率的（間接的）な発話をする重要な動機が、対人配慮（politeness）である。したがって、「相互交渉における意味」を考える語用論研究において、対人配慮（politeness）のあり方は大きな関心となる。

対人コミュニケーションのあり方を決定づける要因には、話題の人物との社会的関係、性別、場面などさまざまなものがあり、どのルールあるいはストラテジーを使ってポライトネスを表現するのが適切であるかについては、話し手と聞き手の属する文化や社会によって異なる。実際の発話の意味を決定づける要因を包括的に示そうとしたのが、Brown & Levinson（1978, 1987, 田中監訳, 2011）のポライトネス理論（普遍的原則）である。しかし、このモデルの妥当性については未だに錯綜した議論が展開されている。

本報告では、「日本語と韓国語の呼称選択に見られるポライトネス・ストラテジー」「呼称使用の容認性判断と性格特性の影響」に関するこれまでの研究成果を踏まえつつ、現在取り組んでいる研究課題「日韓両言語学習者の呼称使用ストラテジーに対する容認性判断と性格特性の影響」、そして今後の研究展開について述べる。

※終了後 18 時から Yucca で、第二部として自由なトークを展開できる場（山口国際文化学 SALON）を準備しております（有料）。こちら皆様積極的なご参加をお願いいたします。

